古文を読むために　2

このコラムでは省略の問題を扱っている。読み慣れてしまえば、何でもないことであるが、古文には省略が多い。省略しても文意が通るので省略される。しかし、生徒のように苦労して古文を読む場合、その省略がしばしば分かりにくく、文意をとるのに混乱させられる原因となる。「が」「を」「に」などの助詞だけの省略ならまだしも、主語自体が、目的語自体が省略されるのだから、とまどうのも無理はない。古文に読み慣れることが一番の解決策であるが、文節や単語に対する感覚を鋭くしておくことも大切である。その点をこのコラムのねらいとしたい。

1 文・文節・単語

文・文節・単語のそれぞれの定義については教科書のとおりである。ここで注意を要するのは文節の考え方である。文を文節に区切るにはある程度意味を理解している必要がある。そのため、特に古文を文節に区切るのは初期の段階では難しい面がある。丁寧な解説を心がけたい。文節は意味の上でそれ以上区切ることができない単位である。したがって簡単な文例で文節に区切ることで、特に付属語はそれだけでは意味がとれないことをきちんと解説しておくとよい。また、文節と単語の関係についても説明しにくい部分がある。主語・述語といった場合、これが単語に与えられた名称とし、区別のために主部・述部という名称を用いることがあるが、通常は主語の文節、述語の文節を指す。主語・述語とは文節相互の関係を示す言い方である。それについて説明しておく。

◎**文節相互の関係**

●**主語・述語の関係**　次の三つの関係で文節が結びつくとき、主語・述語の関係という。

1　何が（主）どうする（述）　鳥　鳴く
2　何が（主）どんなだ（述）　山　高し
3　何が（主）なんだ（述）　我　師なり

●**修飾・被修飾の関係**　前の文節が後の文節の意味を詳しく表したり、叙述の態度を限定したりする場合、前の文節を修飾語、後の文節を被修飾語という。

1　被修飾語が体言のとき、連体修飾語という。
2　被修飾語が用言のとき、連用修飾語という。

●**独立語**　文の一部分であるが、前後の文節と直接関係を持たない文節を独立語という。感動・接続・呼びかけ・応答などを表し、文の初めにあるのが普通である。

このような文節相互の関係を正しく理解することが、古文を読み解くうえでも大切である。ただし、この後の活用の知識なども必要であるから、ここではアウトラインを示し、再度確認の時間を設けるとよい。

2 品詞

単語とは、それ自身意味や働きを持ち、それ以上小さくは分けられない語の単位をいうが、その単語を理解する際に、意味や形、働きなどの文法的性質に基づいて分類して捉えることがあり、それを品詞と呼ぶ。教科書Ｐ一六に載せた品詞分類表を参照された

い。

この中で特に注意を要するものは用言・体言である。用言は活用する自立語で、単独で述語になることができる動詞・形容詞・形容動詞の総称であり、体言は活用せず、単独で主語になることができる名詞のことである。連用修飾とは用言に掛かる修飾という意味であり、連体修飾とは体言に掛かる修飾という意味である。このように用言・体言という言葉は広く用いられるのでしっかりと理解しておきたい。

●自立語と付属語　品詞の理解が正確になされれば、助動詞・助詞の二つの品詞のみが付属語で、それ以外の品詞は自立語であるので、この区別は容易である。しかし、品詞に対する意識がない者はこの区別をするのも難しい場合がある。基本的な考え方は次の通りである。第一に自立語は必ず文節の初めにあり、付属語は文節の初めにはこないことである。第二に各文節には必ず自立語があるが、付属語はない場合もある。第三に各文節に入る自立語は一語だけということである。一方、付属語は一文節に複数入ることもある。したがって、自立語さえしっかり見分けることができれば、とりあえず、それを基準として文節に分けることができることになる。

●活用する語と活用しない語　この段階では現代語を例にとって活用する、しないを説明してもよいだろう。語には活用する語としない語があることさえ理解できれば、実際の活用については各品詞を学習する時に理解すればよいのである。

◎品詞分解

ある文中の単語を表に掲げた十種の品詞に分けていくことを品詞分解という。古文の文意を正しく捉える際にこの品詞分解が役立つことがある。しかし、文法が品詞分解に尽きるわけではなく、また、単語の分け方・品詞の分類の仕方自体が異論を含む場合もある。おおよその知識は必要ではあるが、品詞分解を万能視するのはかえって危険なこともある。生徒の実態に即して、段階に応じて必要な品詞分解ができる力を育てればよいであろう。各品詞の説明が終わった段階で正確な品詞分解ができるようになればよい。繰り返しになるが、品詞分解は解釈の助けになる場合に必要なのであって、それ自体が目的になるわけではないことは押さえておきたい。

品詞を分類する場合に注意を要することに接頭語と接尾語がある。単独では一語を構成しないで、常に他の特定の単語の上あるいは下に付いて、その単語とともに一語を構成するものを接辞といい、他の単語の上に付くものを接頭語、下に付くものを接尾語という。「語」とは付いているが、単語とは認められない。

●接頭語　他の単語の上に付いて、意味を添える働きをする。接頭語がついても、もとの単語の品詞は変わらない。例をあげると次のようなものがある。

名詞に付くもの　御前　初霜　小夜　素足　真心
動詞に付くもの　いい隠る　うち笑ふ　さし出づ　ひた走る
形容詞に付くもの　いち早し　か弱し　け近し　こ高し

●接尾語　他の単語の下に付いて、意味を添える働きをする。別の品詞になることがある。

〈品詞が変わらないもの〉
名詞に付くもの　中将殿　松ども　乙女ら　一首　二膳

＊「一首」「二膳」などのように数詞に付くものがあり、これを助数詞という場合もある。

〈品詞が変わるもの〉

名詞となるもの　暑さ　苦しみ　いはく
動詞となるもの　つよがる　紫だつ　けしきばむ　時めく
形容詞となるもの　ありがたし　らうがはし　露けし
形容動詞となるもの　苦しげなり　晴れやかなり
副詞となるもの　道すがら　手づから

接頭語、接尾語であることを理解したほうが品詞を考えやすいものがある一方、あまり意識しないほうが品詞を考えやすいものもある。必要に応じて解説すればよいのであって、接頭語であることや接尾語であることに神経質になりすぎてはいけない。

●複合語　単語が二つ以上結合して、一つの単語として、新しい意味や機能を持つようになった言葉を複合語という。「朝夕」「石橋」「近寄る」「心ぼそし」などがこの例である。複合語についても「走り回る」は「走る」と「回る」の二語かそれとも複合語かとなるとどちらとも決めにくい。その言葉が単語として辞書に載っているかどうかを目安にすることもできるが、これも辞書によって差がある場合も考えられる。複合語についてもあまりこだわりすぎず、知識として知っていたほうがよいくらいに考えておく。

3 古文の特徴

古文には助詞の**省略**が多い。そのために文全体の意味が分かりにくい場合が生じる。しかし、落ち着いて前後を読めば容易に想像できるから省略されていることを理解しておけば、さほど省略について神経質になることはない。また、助詞だけではなく、主語や目的語そのものも省略される場合もあるが、これも現代語でも見られることであるうえに、文意を理解していれば助詞の省略と同様容易に補える。省略が多いということだけは頭に入れておく必要があるが、文脈を正しく理解することを第一に考えていくことが古文を読む際には最も大切なことである。

4 古語辞典の引き方

古語辞典は、基本的には国語辞典と同じように引くことができるが、歴史的仮名遣いで引くこと、活用する語については、動詞・形容詞は終止形に直して引くこと、形容動詞は語幹で引くものが多いことに注意する必要がある。

調べたい語を古語辞典で引くと、意味が複数あげられていることがある。その場合は、それらの中でどの意味がふさわしいのか、前後の文脈を確かめながら決めることが必要となる。

（畠山　俊）